



岩崎 徹 (いわさき とおる) さん
 1976年東北大学大学院修了。同年札幌
 大学経済学部専任講師。79年助教授。
 84年教授となり現在に至る。農学博士。
 <主要論文など>
 「経済構造調整下の北海道農業」(共
 著・北海道大学図書刊行会・1991)。
 「農業の国際化」とは何か―戦後再編
 世界体制の崩壊と世界農業問題の新展
 開―(飯島源次郎編・「転換期の協同組
 合」筑波書房1991)。

らないと言います。そして、何よりも労働時間が減って余裕ができ
 たことがよかったと言っています。
 近代酪農の時は、忙しすぎて精神的にも余裕がなく夫婦喧嘩ばかり
 して子供にも八つ当たりしていたが、余裕ができると家族でよく
 話し合うようになり仕事も楽しくなった、と言っておりました。
 この学習会は夫婦参加を原則としております。体験レポートも夫
 婦で報告していますので、奥さんの話の方がリアリティがあったり
 して楽しい雰囲気でした。このグループの取り組みがどこまで一般
 化できるかは研究に値しますが、農業本来のあるべき姿を示唆する
 もの、適正規模とは何かを示唆するものとして注目したいと思いま
 す。厳しい時代だからこそ農業を楽しくやる原点に立ち返って、個
 別の経営、地域の農業、北海道の農業を考えていく必要があると思
 います。『静聴ありがとうございました』

北海道地域農業研究所第四回通常総会特別講演から収録
 (平成六年五月一三日・札幌市フジヤサントラスホテル)



各種研究会・研修会等への
 報告者・講師派遣
 (平成六年八月一〇月)

○平取町農協 農政協議会・営農
 集団連絡協議会視察研修

主 催 平取町農業協同組合
 と き 平成六年八月二五日
 テーマ 「これからの地域農業振
 興の方向について」
 講 師 富田 義昭 (当
 研究所・常務理事)

○平成六年度 全道農業農村活性
 化推進研修会

主 催 北海道農業構造改善推進
 協議会
 と き 平成六年八月三〇日
 テーマ 「活力ある地域・経営つ

くりとリーダーの役割」
 講 師 七戸 長生 (当研究所・
 所長)

○平成六年度 (通算第27回)
 農産物流通研究会

主 催 (財)農業開発研修センター
 (京都市)
 と き 平成六年九月六日
 テーマ 「野菜産地の生産・販売
 対策」
 報告者 富田 義昭 (当研究所・
 常務理事)

○平成六年度 北海道農村生活研
 究会 年次大会

主 催 北海道農村生活研究会
 と き 平成六年九月一〇日
 テーマ 「これからの農村生活へ
 の提言」
 講 師 七戸 長生 (当研究所・
 所長)

○平成六年度 日本農業経営学会
 秋季研究大会
 主 催 日本農業経営学会
 と き 平成六年一〇月一五日

個別報告テーマ 「公共牧場の公

共性の再検討」

報告者 井上 誠司(当研究所・
研究員)

○平成六年度 東欧特設「農産物
市場経済コース」研修

主催 国際協力事業団(JIC
A)・帯広市が道内研修
を受託

とき 平成六年一〇月一八日

テーマ 「野菜の生産と市場動向」
分担講義 富田義昭(当研究所・
常務理事)

○平成六年度 中央アジア・コー

カサス地域特設「農産物市場経
済コース」研修

主催 国際協力事業団(JIC
A)・北海道農政部が道
内研修を支援

とき 平成六年一〇月二〇日

テーマ ①「北海道農業の営農シ
ステム」
②「野菜の流通と物流管
理技術」

分担講義 富田義昭(当研究所・
常務理事)



ホクレン夢大賞

創設される

(当研究所の構想提案が実現)

このほど公表された「ホク
レン夢大賞」の資料によると、
大要が次のとおり記されてい
ます。

―北海道農業の元気の源は農業
にかかわる人々の情熱です。そし

て、ひとりひとりの夢や希望が農
業にそがれることで、農業はもつ
と元気になると私たちは考えます。

そこで、ホクレンでは、21世紀
の農業をもっと元気で、身近で、
夢と希望にあふれたものになしよ
うと「ホクレン夢大賞」を創設しま
した。

自らが農業にたずさわる人、農
業に新しい風を吹き込む技術や研
究、そして農業に大いなる期待を
込めて応援してくれる人など、お
おきの人が北海道農業を支えてい
ます。

こうして様々な角度から農業に
かかわる人、団体などにこの賞を
贈りたいと思います。

日頃の活動や研究の成果をご応
募ください。―

詳しい内容は省きますが区分は
次のとおりです。

- 一、農業者部門
 - 二、研究普及部門
 - 三、農業応援部門
- 応募規定など問い合わせ先
ホクレン役員室
ホクレン夢大賞事務局

☎011(232) 6108
FAX (242) 5047

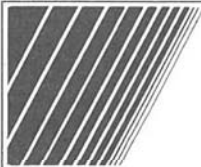
ところで、この構想づくりにつ
いては、平成四年度に「北海道に
おける地域農業活性化支援につ
いての調査」(ホクレン夢大賞Ⅱ仮
称)構想についての提案として
ホクレンからの依頼を受けて、当
研究所が調査・研究に取り組みま
した。

行政や農業団体の実務者でワ
キンググループをつくり素案を作
成・検討し、さらに幅広い分野の
学識経験者で「特別委員会」を構
成するなど、五カ月にわたる検討
の結果をまとめ具体的な構想の提
案を行いました。

その後、ホクレンでは十分な内
部論議を経て、このほど公表され
ましたが、当研究所からの具体的
な提案の原案がほぼ活かされてお
ります。

公表以来多くの方々から関心が
寄せられ、照会も相次いでいると
のことです。

ここに構想づくりに関与した方々、
貴重な助言や資料提供をいただいた
諸機関・関係者に対し、改めて



DATA FILE

関連事項 / DATA

- 横浜国立大学経済学部
〒210 横浜市保土ヶ谷区常盤台156
☎054 (335) 1431
北竜町農業協同組合
〒078-21 雨竜郡北竜町字和36-3
☎016434-2211
本別町農業協同組合
〒089-33 中川郡本別町北5丁目2-1
☎01562 (2) 3111
別海農業協同組合
〒086-02 野付郡別海町別海西本町4
☎01537 (5) 2201
市民生協コープさっぽろ
〒060 札幌市中央区北4条西11丁目13
☎011 (271) 7711
北海道大学経済学部
〒060 札幌市北区北9条西7丁目
☎011 (716) 2111
⑧農村生活総合研究センター
〒102 東京都千代田区一番町19
☎03 (3230) 0165
北海道大学農学部
〒060 札幌市北9条西9丁目
☎011 (716) 2111
芦別市農業協同組合
〒075 芦別市北4条西1丁目1-6
☎01242 (3) 1111
札幌大学経済学部
〒札幌市豊平区西岡3条7丁目
☎011 (852) 1181

いまそれを食うことの十二分な理由と、食うこと、食えないことにかかわる知られざるドラマを持っていた。(中略) 残留日本兵士の肉食、韓国人元従軍慰安婦の苛烈な食生活などがそ

台風26号ならびに北海道東方沖地震による被災地域のみな様に、謹んで心からお見舞いを申し上げます。
⑧北海道地域農業研究所
役職員一同

(編集後記)

●イザヤ・ベンダサン著『日本人とユダヤ人』が、ベストセラーになったのが昭和四六年だった。その一、「安全と自由と水のコスト」に曰く。

お礼を申し上げると共に構想の実現を喜びたいと思います。
そして、この趣旨が活かされ多くの応募が継続的に行われ、北海道農業の活性化支援に波及するよう、また、着実に育てていくためにも、関係者の更なる支援をいただくことを念願しております。

「日本人は、安全と水は、無料で手に入ると思い込んでいた」と。
その二、「お米が羊・神が四つ足」では、「日本人は(本人は気がつかなくとも)米に特別な感情をもっている。昔の日本人は「ゴハン粒の一つ一つには親音様が宿っておられる」といって一粒も無駄にせず、洗い流した飯粒を集めてかめにためのりにした。苗代にしめなわをはった。」
その三、「し」のびる日本人の迫害」はつづけて「ユダヤ人は、過去二十二年の経験で、安全には「高いコスト」がかかることを覚悟し、絶えず本能的にこれへの対策をたてる。(中略)もちろん、政治天才の日本人が政治低能のユダヤ人のようなへまはやるまい。また、ユダヤ人のもっていないなかったもの、すなわち自らの政府と強大な武力をもっている。」

(中略)日本人が、今、どういう位置にあるのか、いろいろと考えさせられるのは、私だけではあるまい。一と。その他の各章にも、今にして思えば、まことに示唆に富んだ数々のことが綴られていたことを知らされる。
●本年六月に発刊された、芥川賞作家で共同通信社特派員でもある辺見庸氏のノンフィクション『もの食う人びと』は、世界各地(バンングラデシュ、ソマリア、ロシア、旧ユーゴスラビア)の恐るべき「食」の実態を生々しく伝える。「きたるべき飢渴の日のために」と、筆者が警告を発するとおり驚愕にも値する食の貧困が地球上の至る所で実存している。
筆者は、この著のあとがきに、次のようにも言っている。
「行く先々にももの食う人びとがいて、

れである。いずれも関係者の記憶に頼るしかなかった。それらをなぞり、悪夢も幻もこの口で噛みしめてみて、はじめて私は、奥深いドラマの一端を知ることができた。(中略)
飽食の時代が、あたかもそのつけが回ってくるように、空腹の時代に転じるのは、そう果てしなく遠い先のことでもないのではないか。私の胃袋は長旅の末にそう感じている。一と。

●この二つの著書と、昨今の我々の住む自然や社会環境とを重ね合わせてみて、慚怍たる思いを抱くのは、取越苦勞とばかりは言えまい。記録的な猛暑と日照りがつづいた今夏、西日本一帯は渇水状態が住民生活を脅かし、「日本人は水が無料」も、神話と化した。「食」の安全と安定供給に対する不安も、『もの食う人びと』のドキュメントに、ただ驚いて対岸の火事を眺めるがごとき感度でもいられないようだ。本号・特集のシンポジウムの議論でも、多くの識者が懸念しているように、人類自らが、自然や社会の環境を真面目に守っていくという心の持ち方が、今こそ大切ではなからうか。
(K・T)